

「ちょうどそのとき」

ダニエル 5 : 5 - 17

March.1.2020

ダニエル 5 : 5 - 17 (パワポ)

Preface

BC 539年、バビロン帝国を繁栄へと導いたネブカドネツアル王が亡くなってから、23年が経ちましたが、その間王が4度も代わり、バビロン帝国はその威光を失いかけていました。

そしてバビロン帝国の最後の王となったナボニドゥスは、その在位のほとんどを、台頭してくる新興国家との戦いに明け暮れなければならず、ついには（キュロス王が導く）メディア・ペルシア連合軍に敗れ、アラビアの沙漠へと逃げていきました。

ナボニドゥスがバビロンの都を留守にしている間、臨時責任者として王の代役を任せられていたのが、ダニエル書5章に出てきますベルシャツアルであり、正式な王ではないにもかかわらず、王のような権威を振りかざしていました。

父ナボニドゥスを破った20万のメディア・ペルシア連合軍が、勢いそのままにバビロンの都を攻め落とそうと、ベルシャツアルのいる宮殿城塞へとやってきました。

そんな中、ベルシャツアルは、やせ我慢をしながら虚勢を張り、国中の貴族千人と共に、男女入り乱れた乱行の伴う不毛な大酒宴を催しました。

「我が国は大丈夫だ。」と、民衆に対して動揺を隠すような、陳腐な政治ショーを行うのです。

そして、そこで決してあってはならないことが起こりました。

酒の勢いに任せて、63年前に祖父ネブカドネツアル王が、エルサレムから運び入れた、まことの神を礼拝する時にのみ、祭司だけが用いることの出来る神の宮の器で、乱行の内に酒を飲み交わしたのです。

ベルシャツアルには、父ナボニドゥスと同じ、大きな劣等感(コンプレックス)がありました。

それは、偉大な覇者ネブカドネツアル王に対するコンプレックスです。

ベルシャツアルにとっては、母方のおじいちゃん、そして、ナボニドゥスにとっては、妻の父、つまり、義父ですね。

偉大な祖父、義父に対して劣等感を抱いていました。

そこでベルシャツアルは、誰も平伏させることの出来なかったあのネブカドネツアル王が、唯一ひざまずき、へりくだったイスラエルの神、唯一まことの創造主なる神様を礼拝するときだけに用いる器で、あの偉大なネブカドネツアル王でさえもしなかった、出来なかった、その器で酒を飲むという行為をもってして、劣等感を克服し、ネブカドネツアルを超えたかのように、自分に思わせ、人にも思わせるという愚行を、白々しくもやってのけました。

Part One

そして、“ちょうどそのとき”、つまり、酒に酔い、乱行に酔い、力に酔い、金に酔い、から元気に酔い、意地とやせ我慢に酔い、罪なる行いをもって自分の弱さと貧しさを包み隠すことに酔い、結果的に神をも恐れぬ冒瀆な生き様をさらした、ちょうどそのとき、

人間の手の形をした神の手が突然現れ、宮殿の塗り壁に、文字が書かれました。

冒瀆の結果、神から告げられた啓示の言葉が、壁に書かれるのです。

その文字を見たベルシャツアルは、尋常ではない恐怖に陥ってしまうんです。

文字というものは、人を恐怖に落とし入れる力もあります。

1週間で100ドルしか支給されず、安価なハンバーガーしか食べられないと、ハンバーガーリーグとも揶揄されるアメリカのプロ野球のマイナーリーグには、4000人以上というたくさんの選手たちがいますが、その選手たちにとって、正に、死を意味する文字があります。

それは、1週間に一度、黒板に書かれる、首を通告する名前の表記です。

チョークが黒板にあたるあの堅い音を響かせながら、ゴンザレス、ジョーダン、スズキ、パーク、カスティーヨ etc 10～20名ぐらいの名前が書かれます。

自分の名前をそこに発見した選手たちは、本当に顔が青ざめて、動揺を隠せない表情を浮かべます。

その名前という文字を見た選手たちの集まったその空間には、何とも言えない張り詰めた空気と恐れと絶望感が支配します。

自分の名前をそこに書かれた日には、荷物をまとめて即座に出て行かなければなりません。ただでさえ安月給なのに、一瞬にして無職です。

自分の名前という文字が、マイナーリーグの選手たちを一瞬にして絶望と恐れへと落とし入れます。夢もへったくれも無くなってしまいます。

野球のコーチが書いた横殴りの文字でさえも、人を絶望と恐怖へと落とし入れる力があります。

また、書聖と言われる王羲之（おうぎし）という中国の書道家（AD350年頃）がありますが、彼の直筆の書は一つも残っておらず、現存する彼の書は、全部

模写されたものです。

で、本人が書いていない模写であるにもかかわらず（日本でもたくさんの人によって模写されていますが、その模写の模写でも）、その文字は力強く、文字が踊り、見る者を魅了し、見る者を捕らえるほどに、王義之の文字には力があるんですね。

人が書いた文字でさえも、人を絶望や恐怖にも落とし入れ、また魅了し、捕らえる力を持っているのですから、ましてや、人の指の形をした神の指が現れて、壁に文字を書いたのですから、その驚愕、仰天、恐怖、畏怖、畏敬は、形容しがたいほどのものであり、神の臨在が、その場を満たし尽くしたことは、容易に想像がつかます。

しかも、そのあらわれた指によって、文字が、王宮の塗り壁に書かれたというのは、当時の文化的背景からすると、あるまじき事件でした。

というのも、当時中東世界では、自分たちの成してきた功績や業績や歴史を、絵や象形文字を用いて、壁に記録していました。

言わずもがな、バビロンの王宮の壁ですから、大バビロン帝国の歴代王が成してきた様々な功績や実績や手柄などが、当時最も優れた絵描き、もしくは書家の手によって、それはそれは誇らしげに、王宮の壁一面を埋めていたことでしょう。

なのに、バビロン帝国の栄光そのものである、その絵や文字が描かれている塗り壁の上に、もしくは、一度消されたかも知れません。

その上に、神の手によって、**overwright** 上書きされたのです。

（神の手による）バビロンの栄光の全否定ですね。

神の宮の器で酒を飲み交わすという神への冒瀆と愚行を働いた直後ですから、ベルシャツアルは、「ああ、これは、あのネブカドネツアル王が唯一へりくだって、ほめたたえた万軍の主なる神の神託が降りたんだ！」と、すぐに直感したはずです。

ダニエル 5 : 5 - 9 (パワポ)

ベルシャツアルのみならず、千人の貴族、側室や侍女たちを含めた 2000 人以上の人たちの酔いは、神のご臨在の前に、一気にさめ、顔色は変わり、腰の関節が緩むほどに怯え、恐怖に膝の震えが止まらなくなっていました。

文字を書いた指は消えたのに、その文字からは、神の威光と尊厳が溢れでました。

そして、まことの神の前にへりくだるということを知らないベルシャツアルには、それは**恐怖**でしかありませんでした。

もっと言いますと、人が羨み、人生の目標にするほどの富や力を手にしているベルシャツアルの根本を支配していたのは、**恐怖でありました**。

神の臨在と威光と尊厳を表す、その神の手によって書かれた文字が、彼の人生の動機である**恐怖**を炙り出したとも言えます。

同じように、私たちも、神の御旨をあらわす文字で埋め尽くされている聖書の言葉、その文字の前に、神のご臨在を体験した時、私たちの内にあるものが、炙り出されていきますね。

Part Two

ベルシャツアルを見て、ひとつ気付かされることは、人のつくる栄華の動機は、結局、**恐怖だ**ということです。

恐怖が、文明、技術、知識、教養を発展させ、その発展を自ら美化し、栄華へと昇華させようと努めるんだけど、神のご臨在と文字の前であって、その厚皮が引っぺがされると、結局、**恐怖**が出てきます。

もちろん、神の慈しみによる繁栄も大いにありますが、人の成す繁栄は、必ずとげや毒が伴い、**恐れ**が付いて回ります。

多種多様な恐怖・恐れがありますが、その皮を一枚一枚引っぺがしていくと、最後に出てくる恐怖は、行きつくところ、死に対する恐怖ですね。

使徒パウロがローマ書の5章で、死が人を支配したと言っていますが、

ローマ人への手紙5：12、17、21 (パウロ)

今、パウロは、ここで、人にとっての根本的な問題は、罪の結果招いた死であって、その死がすべての人に広がり、その死によって人が**支配**されていることだと言います。

でも、その死を打ち破る唯一無二の方法として、神様が提示したのが、**イエス・キリストの恵みによるいのちの支配**です。

イエス・キリストを信じることによるのみ与えられる**いのちの支配**、すなわち、**永遠のいのちの回復**によるのみ、人は、**死の恐怖から解放**されるんです。

ベルシャツアルには、この**いのちの支配**、**死の恐怖からの解放**がなかったんですね。

どんな豪勢な大宴会をもってしても、どんな権力や富をもってしても、どんな

性的快樂や偶像をもってしても、(死の) 恐怖から解放されることはありませんでした。

それが、神の手によって書かれた文字が、明らかにしてしまいました。

恐怖に駆られ大声で叫びながら、バビロン中の知者たちに、その書かれた文字を解読する者には、権力の象徴である紫の衣を着せ、金を与え、第三の地位にまで引き上げると宣言しますが、誰も、その文字を読み解くことが出来ません。(第三の地位とは、父ナボニドゥス、自分に次ぐ、地位のことです。)

当然です。神の言葉と啓示は、世の知恵や英知で解くことは出来ません。聖書もそうですね。聖書も世の知恵や英知で解くものではありません。

この前にメッセージの時にもお話ししましたが、世界4大文明の一つであるエジプト文明を凌駕するほどの文明を誇ったのが、バビロンです。

そのバビロンの英知をもってしても、解けません。

ダニエル書に何度も繰り返される表現があるのですが、それは、「誰も解き明かすことが出来なかった。」という表現です。

ダニエルとネブカドネツアルのやり取りの中で、何度も見てきました。

私たち人間は、身もだえするほどに、堪えて、努力すれば、大概の問題は、解くことが出来るかもしれませんが、決定的なこと、本質的なことは、神の前にひざまずかなければ、決して解決することが出来ません。

世の方法しか知らず、世の方法や人間的な方法を使えば使うほど、わからなくなりますし、恐怖が増すばかりです。

神の啓示、神の言葉ならば、なおさらのことです。神の言葉や啓示は、神様自ら明らかにしてくださらなければ、わかりません。

以前、ダニエルが、大殺戮が起こるかもしれないという危機の中で、誰も解くことが出来なかったネブカドネツアル王の夢を解く時にも、ダニエルは、天の神様に祈り、あわれみを乞うことによつてのみ、解くことが出来ました。

Part Three

いよいよもって、ベルシャツアルの恐怖は、頂点に達します。

人は、知りたくても知ることが出来ないことに対する恐怖があります。

ベルシャツアルは、神の手による文字が宮殿の壁に書かれて残っているという事実だけでも、恐ろしいのに、その意味が分からない。正に、恐怖ですね。

そんな時、王母が現れます。

ダニエル 5 : 10 - 12 (パワポ)

この王母とは、ベルシャツアルの母、つまり、あのネブカドネツアル王の娘です（先々週のメッセージを思い出してください）。

誰もひざまずかせることも出来ず、誰にもひざまずかなかった偉大な王、世紀の覇者、父ネブカドネツアルが、天の神様以外で、唯一額ずき、その前にひざまずいた人、それが、ダニエルでした。

ダニエル 2 : 46 - 48 (パワポ)

という衝撃的な場面を生で見たのが、ベルシャツアルの母、王母でした。

ダニエル 5 : 10 (パワポ)

5 : 10 で、日本語では、ものすごく丁寧な言葉で、息子ベルシャツアルを諭すかのようにナイスが言葉で訳されていますが、英語では、**Don't be alarmed** と、「じたばたなさんな！」と、叱ってるんですね。

常日頃から、自分の父の名をおとしめる夫ナボニドゥスに対しても、息子ベルシャツアルに対しても、（歴史を見ますと、）腹立たしく思っていたようです。

その王母が、全バビロン人が伝説のように語り継いでいる父ネブカドネツアル王が、この上なく丁重にもてなした神の人ダニエルについて言及します。
なんて言っていますか。

ダニエル 5 : 11 - 12 (パワポ)

王母のダニエルを表す言葉がすごいことになっています。

聖なる神の霊が宿る人であり、才気と聡明さと、知恵に溢れた比肩する者のない人だと言います。これ以上の賛辞がありますか？

そのダニエルを呼ぶしか、神の手によって書かれた文字を解き明かすことは出来ないと言って、ダニエルを呼びだしました。

この時のダニエルの年齢は、82歳です。

50代半ばで、仕えていたネブカドネツアル王が死んで、表舞台から退いて30年近く立っていました。

15歳で、捕虜として捕らえられてきて、神の導きのうちに国の高官、有力者として数十年働き、引退して、そのまま人生を終えるかと思ったら、また歴史の

表舞台へと登場してきました。

ダニエルは、現役を退いて、ネブカドネツアル王以降、たった7年間で4人も王が代わる権力の変遷を見ながら、傾いていくバビロンの滅亡を感じていたと思います。

というのも、ネブカドネツアル王の夢を解く際、バビロンが滅びて、メディア・ペルシア時代が来ることを、ダニエルはすでに知っていました。

20万の大軍を率いてきたペルシアのキュロス王がどれだけ有能な王であるのかも知っていたはずですし、

メディア・ペルシア軍に包囲されたバビロンの都の運命が風前の灯火であるにもかかわらず、不毛な大酒宴を開いている幼稚で分別のないベルシャツアルを、情けなく呆れる思いと、不憫な思いと憐れむ気持ちを抱きながら、国のために祈っていたことでしょう。

そうしているところ、突然王から、呼び出しがありました。

王から送られてきた使者と王宮に向かっている道中、宮殿で起こった指が現れた事件の説明を聞きながら、心の準備をして、いざ乱行入り乱れた跡も生々しい王宮に立ちました。

この時、初めて、ダニエルは、事態の深刻さをまざまざと見せつけられ、愕然としたはずです。その目には、涙がたまって、真っ赤になっていたかもしれません。

特に、ダニエルを憤激させたのが、神を礼拝する時、祭司たちのみが扱うことの出来る神の宮の器が、酒を飲み交わす盃として使われていたことです。

捕虜として捕らえられてきてから、67年間、ただ一度も神を冒瀆したこともなく、あの誰もが恐れたネブカドネツアル王の前にあってできえも、主なる神様の名をおとしめないために、命を懸けたダニエルは、その横暴極まりない冒瀆ぶりを見て、思いました。

「ああ、この国は終わった…」　ダニエルの胸中によぎった思いです。

そんなダニエルの姿を見た、特にその眼光を見たベルシャツアル、そしてその場に居合わせた2000人以上の人たちは、みんな凍ったことでしょう。

現役を退いた82歳の老人ではありましたが、キリストの香りを放ち、神のご臨在を感じさせるダニエルの静かな気迫に満ちた姿は、その場を圧倒し、うわさに聞いていた以上でした。

その場にいる人たちのほとんどが、初めて会ったかも知れません。

そんなダニエルに、ベルシャツアルは、無礼な言葉をもって話しかけます。

ダニエル5：13－14（パワポ）

～（事実がどうかしらんが）、聞いている。

王母が、これ以上ない贅辞をもって、ダニエルを紹介してくれたにもかかわらず、「お前なんか、所詮、うちの一族につかまってきた捕虜に過ぎんだろ？」というような言い草です。

でももしかしたら、ベルシャツアルは、ダニエルと、ダニエルの信じる神様が怖かったのかもしれない。

一目見て「あ、まずい。この老人には、全部見透かされている。」と恐れたんだけど、王だというプライドと、やせ我慢と、意固地な意地と虚勢で、こう話しかけたのでしょ。

畳み掛けることもできないのに、あたかも畳み掛けるかのように、「捕虜出身の老いたお前に、今一度、出世する機会を与えよう。」と、こう続けます。

ダニエル5：15－16（パワポ）

それに、ダニエルがこう答えます。

ダニエル5：17（パワポ）

「王よ、あんたがくれる金なんか要らんよ！ あんたが取るときな！ 権力？ そんなものもいらん！ ただし、神の言葉だけは、しっかりと宣べさせていただきます！」

滅びゆく国の報酬をもらって、ベルシャツアルのしもべになんかにはならぬいし、その金と力で、私を動かすことは出来ない！ということですね。

ダニエルは、断固として、王の報酬と栄誉と力を拒否しました。

15歳の時から、何一つ変わっていません。

ダニエル1：8－9（パワポ）

15歳の時も、王が食べるごちそうや酒で身を汚すまいと、拒否しました。

もしかしたら、ベルシャツアルが開いた大酒宴に招待された貴族のうちの一
人だったのかもしれない。でも、そこにダニエルはいませんでした。

ダニエルの生きる動機は、お金じゃないですね。力でもありません。快樂でもないですね。ダニエルは、世の繁栄にあずかることを動機に生きていた

のではありません。

富ではないものを富とする世の中、知識ではないものを知識とする世の中、力ではないものを力とする世の中、平安ではないものを平安とする世の中で、
金に酔い、セックスに酔い、名誉に酔い、笑いに酔い、組織に酔い、趣向趣味に酔い、酒に酔い、それこそ人間の生き様だと吹聴する世を、なお拒絶するダニエルの姿。

世は、本当にひっ迫すると、ダニエルような真の神の人を求めるようになっていきます。

人間的に見たら、とうの昔に一線から退いた一人の老人、しかしその老人がかもし出す信仰的気迫、目の輝き、これ以上ない好条件を瞬く間に拒絶してしまうカリスマ、そこにいる誰もが、「まだダニエルは死んでいない。」と思ったことでしょう。

大帝国の1000人以上のVIPが、ひとりの老人の登場に、微動だに出来ません。これが、まことの神の人の姿です。

獅子は腐った肉を食べないと言いますが、神を冒瀆する腐った肉を決して食べることのないダニエル。

Conclusion

私たちクリスチャンが、世の中が悪いと言いながら、後ろでは世がくれるわいろを貰っているならば、決して世を動かすことは出来ません。

世がひっ迫したとき、人々が尋ね求めてくることもしません。

私たちキリスト者は、神の霊が宿る神の宮です。

私たちは、私たちのうちにある神の栄光がどれだけ大きいものなのかわかっていないかもしれません。

ダニエルは、捕虜出身の一線を退いた一老人に過ぎませんでした。神様は最後の最後まで、彼を放さず、歴史のど真ん中へと今一度立たせます。

そして、ネブカドネツアル王にも全面勝利した霊的気迫で、その場を圧倒するのです。

来週以降の話になりますが、バビロンが滅び、ペルシア王朝が立つというその時にも、ダニエルは、歴史の表舞台へと入れられていきます。

ダニエルは、神の器として用いられ続けて行きました。

引退は、私たちが決めるのではなく、神様が決めることです。

私たちは、この地上で、息を引き取るその瞬間まで、神が、いつ、どんな形で用いてくださるのかを知らないということを、知らなければなりません。

また、その用いられ方が、もしかしたら命を人生をかけなければならないことなのかもしれません。

だから、ダニエルのように、日々祈りと御言葉で準備するのです。

この時代、この日本で、そしてここで、神様は私たちに、ダニエルのような信仰的気迫を期待しておられるような気がしてなりません。

そして、信仰的気迫を帯びる者へと導いてくださる、主イエス様を、さらに信じていきましょう。

お祈りしましょう。

祝祷：ダニエル 1 : 8 - 9